

によつて規制する点において(第二節)、まさに過去史・現在史・未來史の批判的止揚者「永遠史」として保証せらるべきものとす

る。次いで「補遺」として、「美術史学と文化史学」および「宗教美術史の課題と方法」なる二題を論ずる。もつて美術史を一例として、一般に特殊専門史は、単に文化史学へ対立すべきではなく、そのままに包摂せらるべきこと、また文化史学は、これらの特殊領域の内面的雙関關係を把握して、「現時の歴史学の分解作用」を解消すべきことを注意する。最後に「附録」として取められた二論文は、その「まへがき」にも詳記されているとおり、著者がこの方法にもとずいて考察した諸論考のうち代表的な二篇を撰んで、その「作業例」を示したものである。

この書が多く有益な示唆にみちていることは、繰り返すまでもない。それだけにまたこの書は、あらたに少なからぬ問題をも注意させずにはいない。ことに本論の主題たる文化史学的思考の推論において、現在史(文化史)を批判するところには、幾分か体系的強

制の感があり、従つて本来的な意味での文化史が氏の所謂文化史学へ止揚せらるべき必然性について、なお十分具体的な明確さが欠けているように思われる。もちろん氏は、それを明確にせんとして、従前の文化史に随伴した歴史の相対主義(ないし歴史認識への懐疑論など)を指摘してそれを克服せんとし、さらに文化史学の基礎概念を探求してそれを学的に基礎づけんと努めている。それに対する氏の努力は明白である。しかし従來の文化史研究として——そのような危険が伴つたにはせよ——必ずしもすべて不可避的に実証的客観性を見失つて、「芸術」的主観性に漂流しなければならなかつたであらうか。また基礎概念の追求も——それを取り上げたのは甚だ教訓的であるが——ことに美術史学方面などではすでに行き尽されているように思われる現状である。(著者の注意する「間柄」も両極的基本概念の特殊な調停關係として規定され、また様式概念の「類型性」も個性的なる作風概念との関聯にせいで考えられている)基本的について、氏の永遠史としての文化史が、Coce, Dilthey, (Simmel), Riegl, Me-

incke, Hartmannらの(正当に現在のなると、あるいは精神的なる)文化史的思考を、原理的な意味でいかに超越しているかについて、なお遺憾なき説明が聴かれないように思うのである。また美術史を一例として、文化史学がそれらの特殊専門史を包摂すると説くところにも、より徹底的な論証がほしい。本書所説の範囲内では、美術史家の側からもなお相当の異論が予想されるように思う。

しかしこれほど深く関心を惹く諸問題を提出しつつ、文化史学の前途へ一指針を掲げ示されたのは、斯学の正しく学的な発展を願うわれわれにとつて、大なる喜びである。妄評には寛恕を乞うて、この書をひろく未読の方々にお薦めしたいと思ふ。(一九五一年七月、同志社大学出版部刊、A5、二〇六頁、二八〇円) 中村二柄

Rural Social Systems

by

Charles P. Loomis and J. Allan Beegle
New York, 1952.

米國に於て「農村に於ける何かの改善の

必要」を目的に農村問題の研究が起り、実利的、實際的な運動から社会学の一部門としての農村社会学が独自の方法と対称とを確立したのは古い事ではない。そしてこの農村社会学が Sanderson, Sorokin 更に Sims 等の農村社会学者によつて確固たる基礎を置き、その上に見事な成果を挙げるに至つた。これは更に社会人類学或は人類生態学的な方向へと新たに開けられているのであるが本書もこの意味から米國農村社会学の新しい方向を表明するものとなし得るであらう。本書の要題として掲げる社会組織とはいかなるものだろうか。序文に述べられている事からその内容を伺うならばまず社会組織については一般にその二面が考えられ、その一として具体的な面、その二として抽象的な面があげられる。具体的な社会組織とは即ち協同的社会機構であり、家族、教会等が之に当る。第二の型は抽象的なもので関係形式の時間的、空間的に広く見られるものである。そこでこの場合には特殊の人々がその社会の構成員たる事を要しない。所で社会学で問題にする事は人類の文化と相互作用であつて、これにつき諸種の

社会組織の型を作る事にあるとし、社会組織については Sorokin の「複数の人間間の相互作用」の概念を重視している。即ち社会組織は社会的相互作用とそれをつくる文化的要素から成るとする。そして役割、身分、權威を社会組織の構造の第一義的部面として、又目的と標準 (norm) を価値指向の一義的部面として考へる。こゝにいう価値指向とは何か。Mac Iver や Tonnies の「社会は特殊な目的をもつものであるが、この場合友人群とか親族群等では価値指向は「我々の生活を保持する事」という程度の広い意味を持つている。この種の動機から發するすべての集團は「永存」という特性をもつている。前述の様に家族、友人等における意識的に目的を欠いている場合とフットボールチームに於ける意識的な目的性を有する場合を比較してみると、この点が明瞭でこの相違は結局価値指向の相違から來るのである。そこで社会構造と価値指向の兩者の相違によつて社会組織の相違が出て來ることになるとする。次いで社会組織の分析をするためにその基本的屬性としてゲマインシャフトとゲゼルシャフトの概念を適

用する。そしてこゝではゲマインシャフトを家族的、ゲゼルシャフトを契約的なる語で形容する。そしてゲマインシャフトからゲゼルシャフトへの移行をグレードによつて表し、幾つかの集團が何れのグレードにあるかを示さんとしている。即ちゲマインシャフトとゲゼルシャフトは相反するものであるから之を両端に置き、その間を十等分することによつて次の如きダイアグラムを得る。そこで或る



Familiäre Gemeinschaft
Contractual Gesellschaft

集團は五―四の間に、又或る集團は二―一に、更に或る集團は二―三という様にダイアグラム上の位置を示す事によつてその集團の基本的屬性を示している。いずれにしても価値指向という点から見ると農村は宗教的関心が大きくそれだけに伝統的であり、又農家は生産・消費共に共同作業が行われる。そこで都会の家族に比較してよりゲマインシャフト的であるという事になるのだが、最近にこゝに多分のゲゼルシャフト的要素が入り込んで來て居り、本書に述べている様に全巻を通じてこの

移行の状況が各観点からとり上げられてい
る。以上の要旨を以て本書は第一部以下第七
部まで二章に分けられる。(但序文は第一
章)第一部は社会組織としての家族と群で、

この中で農村家族の分析をし、その項目を第
二章の相互作用、機能、形態、第三章の価値指
向、第四章の大きさと構成とする。家族の機
能については家族の出生、生計維持、子弟教
育、対外的身分、協同作業等についての基礎
であることを認め、特にこの傾向は農村家族
に於いて顕著であるとして之等諸点から家族
の相互作用、形態を論ずる。価値指向の変化
については家族そのものの変化によつて起る
ものであるが、序文にもある様に一体農村家
族はゲマインシャフト的であり、そして又農
村社会がゲマインシャフト的であつたが近代
の大工業は農村にまで、更に農村の家族にま
で波及し、ゲマインシャフト的なものが逐次
取去られつゝある。こうした事情の下に価値
指向が如何に変化して来ているか。之れを序
文にも示されたダイアグラムを利用して各種
の農村家族を比較し、共同性、伝説性、計画性
等の分析を行っている。我々にとつて最も関

心も寄せられ、又興味を感ずるのは第二部の
社会組織としての地域群であらう。こゝは第
六一八章から成り、第六章は小部落、近隣群
及商業中心コミュニティ、(trade-centre-
community)、第七章は集落型態、第八章は
農村地域とその経済的面とする。第六章では
Cooles が近隣群を「家族群、交隣群の上か
ら第一義的なものである」とするのを認めて
その社会的意義をとり上げているのである
が、一体第二部では第六章に限らず人類の移
動性が存在する限りそこには地域群があると
し、而もこの様にして出来上る関係には地方
性が生ずるとして人類生活の空間的側面を重
視している。そしてこの考察方法が全般を貫
いている事は明瞭に伺い得るのである。そこ
でこの様な考察方法に基いて近隣群の分析を
行うのであるが、このため数個の实例をあげ
ている。小部落を中心とする近隣群として
Michigan の Cohocan、酪農地域の近隣群と
して Wisconsin の Komesky、更に西南部
の家畜町等が之れで、それぞれ具体例に於
いてその近隣群としての機能や理窟或はそ
れらの変化等について可成り詳細な分析を試

みると共に興味ある図を挿入して読者の理解
を助けてくれる。さてそうした具体的な説明
後に農村近隣群としての一般的な性格をのべて
いるのであるが、その中で近隣群なるものの
意義を明かにしている。即ち本書によれば
「近隣とは人々が相互に隣合つている一地域、
換言すれば人々が訪問したり、物をかりたり
交換したり更に各種の方法で共同したりする
地域である。」そこで近隣群は社会組織の上
での特性として「共同的な近隣行動」を遂行
するものでなければならぬ。所で我る特定
区域の家族間で相互作用が殆んど起らないと
するならばその地域は共同的な近隣群と違つ
た形をとる事になる。例えば Michigan の
Livingston County では地域の半分、又人口
の約半分が近隣群として認められる様な地方
集団を持たない。之は都市や町の近傍にある
近隣群が急速に發展をして来たためである
が、この種のを「拡張された近隣群」と
云つてゐる。次いで商業中心コミュニティ
(trade-center community) に移り、コム
ミニティーの性格を説明した後その境界に
ついての諸問題をとり上げている。即ちこの

コムミュニティーはある都市とか町ばかりでなく周囲の農村をも含めての地域をつくることになるので、その境界は政治的なものとは別個であり、言い得るならば日常生活的である。境界設定のための要素としての他の農村社会学の書物に於いても新聞配達圏や牛乳配達圏等を取り上げている所以であるが、以上の他に本書ではトラック交通量による方法が提案されている。次の集落型態では恰も集落地理学を思わす様な豊富な内容を以て集落の機能・型態等についての説明がなされている。本書に於いて集落型態を考える基礎になつてゐるものは人類活動の形式である。勿論人類の活動形式と集落型態との関係については各種の要素を考える事が出来るのであるが、こゝではその要素として道路の發展をとりにあげている。そこで道路の發展という点から集落を見て外廊集落、衝村、都市周辺等とするのであるが、この考え方は各種集落の变化乃至發展の考察にも適用される。つまり變化が認められる場合變化の要素は交通の發達であるとし trade-center の發達や trade-center と周辺地域との結びつき等を考察してゐる。

尙集落については經濟構造として農村の職業をとり上げた後孤立型集落の問題をかなり精細に考察している。最初に大陸部をのべてから米國に移り New England 初期の散村をあげ、更に米國集落型の特異として見られる C.P.E. のモルモン教徒の集落に及ぶ。かくて最後に計画的農村の集落型態をとり上げて各種の類型を説明しているが、こゝに挙げられているものは孤立集落、道路交叉点の集落、線形集落及び村落（密集）であつてこれらに對して集落圏の一つ一つが掲げられていて興味深い。さてこゝでは一冊の書物の書評である以上矢張り全般に互つての紹介をしなければならぬのであるが、要点もなく八五〇頁に亘る本書の内容全部を限られた紙面で紹介するとなれば章の区分やその題目のみに終ることを恐れ、敢えて地理学徒に興味深き上述の序文、第一、二部に重点を置きしした。そこで第三部以下が残されてしまうので以下項目を附加するに止めておきたい。第三部社会組織としての社会層、第四部社会組織としての宗教団体、第五部社会組織としての教育団体、第六部社会組織としての政治的団体、

第七部農村の諸機關。

概略以上の内容をもつものであるが、特に第一、第二部等の問題について若干の所感を附加させて戴きたい。誰でも感ずる事であるが、前述のようなダイアグラム上に位置を示して或る社会のゲマインシャフト的、ゲゼルシャフト的傾向を数字でグレードに表すという事は若しもこれが正当に容認し得る方法で測定し得た結果であるとするならば結論が明瞭であるだけに利用価値も大きい筈であるが問題はその方法にある。単に數量的に計測し得るもののみを集計して之をダイアグラム上に置いてしまふ事も何かが残されている様に思われるし、又そうかといつて數量的に計測し得ないものに数字でグレードを附する事も同じく割切れないものが残されるという事になる。結局どの程度にゲマインシャフト的であり、又ゲゼルシャフト的であるかという事の表現方法について尙再考の要はなからうか。家族についての考察は人類生態学的な方向をとりつつ分析を進めている様に思われ解れず、Lerner が「環境適応の外部形態」

とする様に家族の外部的な諸問題を取り上げているのであるが、たゞこゝで救う家族が農村家族である限り原則的には農場と関係のあるものである。そこで家族の機能や形態も農場との関連に於いて考察する必要はなからうか。勿論各部で断片的に触れているが、然し全般的な問題として農場を中心とする問題がとりあげられているのではないかと思う。第二部は前述の様に地域集団の問題であるが、従来ともすれば社会学的方法として空間的な考察があまりなされていなかつたのに対して、地域集団の項目の下にかなりの頁数を占めてゐるのは地理学徒として最も親しみを覚えるのである。こうした傾向は特に本書に於いてのみ顯著であるというのではなく、米田農村社会学の最近の著作は一般にこの傾向が強い。然し特に本書に於いてこの点を挙げたのは第六章にもある様に、「人間は多かれ少かれ特殊な地理的地域に制限されない様な社会組織とか協同の型態を維持する事は出来ない」とし、又「人間は動くためのエネルギーを備かさねばならない限り地方集団は重要な意義を有する」としてその集団内の関係が地域化

される事を述べている点であり、こゝに主眼的方法の一端を知る事が出来ると思うのである。こゝに敢えて二三筆を加えたのであるが勿論すぐれた観察と叙述に対して小生如き批判の余地もないし、又社会人類学的、生学的な方法で農村社会学に新たな刺激を加えんとする本旨に満腔の敬意を表したい。尙卷末に価値指向に関する論文が附録として加えられてゐる事を附記しておく。——木地節郎——

Karl Marx und die deutsche Revolution von 1848

von H. Meyer.

Historische Zeitschrift Bd. 172, Heft 3.

ドイツ三月革命はいわゆる流産した市民革命といわれ、またドイツ統一問題との關係においては、市民的な国民国家を市民階級自身では完成し得なかつたこと、而てその課題はプロイセンの地主貴族の掌中に委ねられる結果になつたドイツ史の一齣として見られて来た。即ちこの革命は市民的自由主義のドイツに於ける政治的活動の終曲であるとともに、プロイセンの帝國統一の序曲として考えられ

るのが普通である。十九世紀ドイツ史を七一年の事業に焦点を置いて眺める場合には、市民革命をも国民国家形成の一過程として位置づけることが妥当なことであるのは、いふまでもない。従つて市民革命の歴史の意味に對するドイツ史学の消及は、自由主義—世界市民主義を觀念的國家論、倫理觀に關聯せしめることに重点をおかれる結果となつてしまつた。それ故四八年の市民革命に於いては、既にバリの二月革命と同様に、労働者が革命の線列に参加し、プロレタリアートの革命的勢力によつて影響されるところにアクセントを置くところは正統史学の中においては濫子扱いを受けて来た。それはドイツに於いてもまた極めて顯著な歴史学界の傾向であつたのであり、その影響を最も強く受けた我國の史学にもあてはまることである。従つて三月革命に於ける社会主義の實際的政治活動も、つい最近に至るまでは殆んど省られなかつたと言つても過言ではない。此所に紹介する論文の筆者マイヤーが「社会主義の理論家としてのマルクスに就いては、極めて精細な研究が積み重ねられてきたのに反し政治的實踐家としての彼